

野党連合政権へ、学習を土台に自力をつけて

神戸女学院大学教授 石川 康宏さんに聞く

神戸女学院大学の石川康宏教授に、2020年は政治的にどんな年になるのか、私たちにはどんなことが求められているのかなどについて語って頂きました。



——政治の動きがあらたにくなってきましたね。

今日は12月4日ですが「桜を見る会」をめぐる安倍首相の「政治と税金の私物化」や「反社会勢力との癒着」の暴露をきっかけに、政局が急速に流動化しています。

すぐに目につくところだけでも、①「安倍・菅・二階」という自民党の暗黙のトロイカ体制にきしみが生まれ、二階幹事長が安倍氏を見捨てたとか「菅はずし」が進んでいるといった声が聞こえて

きます、②岸田文雄政調会長と麻生派・谷垣派との会談が行われ、谷垣派が人事体制を刷新し、稲田元防衛大臣の「右翼隠し」が話題になるなどポスト安倍を見据えた動きも目立っています、③その一方で安倍首相は大型のバラマキ補正予算を組み、延命のために10月の消費増税による景気悪化を小さく抑え込もうと

し、④「日本の尊厳と国益を護る会」など男性系天皇中心の国づくりを固執する右翼団体は安倍首相への期待をあらためて表明してもいます、⑤日本経団連が経済成長と税と社会保障の一体改革などの提言を提示しているのは、ポスト安倍への財界・大企業本位の政策的踏み絵とということでしょう、⑥他方で、2019年夏の参院選で相互の信頼を深めた野党は、安倍政権打倒への共闘をさらに強めています。「安倍一強」の時代は終わり、「安倍以後」をめぐる動きが一挙に吹き出してきたという感じですね。

——衆議院選挙もいつあるかわかりません。

「モリ・カケ」問題の時には首相や政権の意図を忖度する官僚を答弁に立たせることができましたが、「桜を見る会」については安倍さん本人が答弁に立たないわけにいきません。来年度予算を決める1月の通常国会は予算委員会が中心ですから、安倍さんはどこにも逃げられなくなりそうです。そうすると「答弁逃れ」のための冒頭解散から衆議院選挙という身勝手なシナリオもありうると思います。早い時期の選挙は、野党側にしつかりした共闘への時間のゆとりを与えないものになりますし、他方で、全国289の小選挙区の自民党候補には本部が公認を与え、選挙資金を投入しますから「ポスト安倍」に向けた党内の動きを制することもできません。12月2日には、安倍さんと公明党代表の山口さんの1対1の夕食会も行われたようですが、その報告を

聞いた公明党幹部からは選挙準備を急ぐ声も聞かれています。「政治の世界は一寸先は闇」。選挙の時期がどうなるかはわかりませんが、兵庫県でもただちに野党の統一候補を決めていかねばなりません。

——選挙の帰趨を決めるポイントはどういうものになるでしょう？

決定的に重要なのは「市民と野党の共闘」が「野党連合政権」の構想を前面に打ち出して闘えるかどうかということですね。「バラバラで無責任な野党」という自民党などからの批判に対する最も効果的な反論は、しっかりした政策合意にもとづく政権構想の対置です。2019年の参院選では13項目の相当に突っ込んだ合意ができましたし、その後もさらに核兵器禁止条約の批准やカジノ導入反対、FTA反対など合意の輪はさらに広がっています。政権構想の合意は十分に可能です。これを前面に打ち出すとなると、選挙の投票率も大きく変わってきます。2019年の参院選で投票しなかった人がその理由の第一にあげたのは、30才以上のどの世代を見ても「どうせ政治は変わらない」ということでした。そ

こには「変えたい」と思っているが「変えられない」という無力感が透けて見えます。多くの政党が力をあわせる「野党連合政権構想」は、そこに「変えられる」という新たな希望を届けるものとなり、選挙結果も大きく変えるものとなります。

——2020年の革新懇には何が求められるでしょう？

衆院選に向けた取り組み以外のところでは、構成員の誰もが毎日必ず学習する集団に変わっていくことがきわめて重要だと思います。1人1人が学ぶということとを、本気で運動の中心にすえていかねばなりません。学習というと遠回りに聞こえるかも知れませんが、「数の力」の大小はその数を構成する個人の力の大小で決まります。県下各地に「市民と野党の共闘」を広げ、これを発展させていく創造的な取り組みは組織の豊かな知恵を必要としますが、組織の知恵を支えるのはそれらを構成する1人1人の知恵に他なりません。新しい時代にふさわしい政策を立案するのにも、まわりの人に紋切り型でない「私の言葉」を届けるのにも、現場の各人のより高い知性が必要で

す。また、もはや死活的な課題ともいえる若い世代への取り組みのバトンタッチにとっても、人としての誠実さとともに知性への信頼を得ることが不可欠です。1人1人が毎日学び、各人が力をつけていくことが、よりよい社会づくりの取り組みを加速する一番大きな力になるものです。

——石川先生の個人としての抱負はどのようなでしょう？

それぞれの取り組みにできるかぎりの形で加わりたいと思いますが、あわせてこれまで研究してきたことを、誰にも読みやすい形でまとめることも大事な仕事だと思っています。この四半世紀のマルクス研究の進展や、「市民連合」の登場に象徴される21世紀に入ってから日本の社会改革の運動は、これまでの社会科学の形をかなり大きく根本から揺さぶるものになっています。私が学生時代から学んだ経済理論や日本資本主義論も相当大きく変わってきましたし、さらに発展することが求められています。その点についての私なりの研究の到達点を中間総括的に示していきたいと思っています。2020年も力をあわせて進みましょう。